

伝統芸能の普及活動に関する考察 —須磨琴保存会を例に—

Popularizing the Traditional Performing Arts in COVID-19 Society
-A Case Study of the Association for Preservation of Sumakoto

人文科学系／文化研究／論文

地域キュレーションコース

福嶋 純之

Atsushi Fukushima

◎研究目的

2020年1月から流行した新型コロナウイルス感染症(以下、新型コロナウイルス)は、演奏会の中止・延期や注文が途絶えた楽器製造会社の廃業など、伝統芸能の普及活動に大きな影響を与えた。これに対応するべく、新型コロナウイルスの感染防止対策の徹底やインターネットを活用したオンライン事業の実施、行政による支援金の給付が行われた。本研究では兵庫県の須磨琴と須磨琴保存会に焦点を当て、須磨琴が持つ意味の歴史的変遷を明らかにし、コロナ社会や今後の普及活動について考察することを目的とする。

◎普及活動の定義

本研究における普及活動とは、「伝承」「交流」「広報」の3つの要素を持つ活動の総称である。「伝承」は須磨琴の歴史や演奏技術を後世へ継承することであり、例として須磨琴教室や免状制度が挙げられる。次に「交流」は須磨琴を介したコミュニケーションによって須磨琴を知ってもらい親睦を図ることであり、例として地域の小中学校への出張授業や体験教室が挙げられる。また会員と地域住民の交流だけでなく、会員同士の親睦を深めるのも「交流」の一つである。最後に「広報」は須磨琴について対外的に認知してもらうことであり、例として演奏会やホームページ、パンフレットが挙げられる。また2021年にYouTubeでの動画配信も開始された。

◎調査方法と考察

調査の過程で2つのアンケート調査を実施した。1つ目は「須磨琴の認知度調査」である。兵庫県内に住む中学生と高校生を対象に、須磨琴への認知度だけでなく須磨琴についての紹介動画を視聴した後で須磨琴に対する興味がどれほど生じるかも調査した。

この調査によって、学校への出張授業など須磨琴保存会による地域との「交流」が功を奏している反面、実際に須磨琴に触れたり演奏を聴いたりする機会が少なく「広報」を通じた普及活動への印象が薄いことから、兵庫県内の中高生の間では須磨琴の認知度が全体的に低いことが分かった。しかし、須磨琴の紹介動画を見て須磨琴に興味を持ったと回答する生徒もいたことから、動画には「広報」として対外的に広めるだけでなく、地域の伝統芸能について再認識する機会を持たすことが分かった。

もう一つは「須磨琴の認識調査」である。須磨琴保存会の会員(以下、会員)を対象に、須磨琴に対する認識や文化庁による「文化芸術収益力強化事業」に対する意見を調査した。また「須磨琴の認識調査」を参考に、会員数名にインタビューを行い、各自の持つ須

磨琴への認識や新型コロナウイルスの感染拡大前後の保存会の普及活動、文化芸術収益力強化事業に対する意見を伺った。

この調査によって、須磨琴保存会の会員の多くは須磨琴を趣味や習い事の一環として演奏しており、須磨琴の演奏技術向上だけでなく、須磨琴教室や演奏会など須磨琴を通して会員同士の親睦を深め、あくまで自らの楽しみの一つとして捉えていることが分かった。

またコロナ社会での普及活動については、会員向けの広報紙である「須磨琴たより」の発行やYouTubeでの動画配信といった、緊急事態宣言下で須磨琴教室が中止になっても、交流を深めたり対外的に認知してもらう機械が儲けられたりした。特に動画配信では実際の稽古風景を意識した指導動画もあげられ、自宅練習での手本として会員に好評だった。

しかし動画配信そのものが周知されていないことや、動画で興味を持ってそれが須磨琴を演奏するという行動に直接繋がるとは考えづらいという意見もあった。今後は現在行っている須磨琴保存会の普及活動についてのリアルタイムな情報発信と、動画配信によって生まれた須磨琴に対する興味を行動に繋げる工夫が必要であると考えられる。

◎結論

須磨琴は時代の風潮に合わせてその楽器の持つ意味を変化させながら普及されてきた。伝統芸能の活動では歴史や伝統を後世に継承していくことも勿論大事だが、これまで培った歴史や技術、表現を基に新しい試みにも挑戦していくことや一般に活動を認知してもらうこともまた重要である。

今後の須磨琴保存会はこれまで通り須磨琴の演奏や活動をしながら、歴史や演奏技法を守り繋いでいくために「伝承」と「交流」を中心に神戸市でしっかり基盤を築くことが必要である。それと同時に須磨琴について広く知ってもらうための「広報」にも力を注ぐべきである。「広報」によって須磨琴に興味を持った人々と会員達が「交流」を深めて、「伝承」へと繋がっていければよいと考えられる。

補足解説

◎須磨琴

須磨琴とは、1枚の板に弦を1本だけ張ったシンプルな構造の楽器であり、幽玄さを持った音色が特徴である。一般的な名称は「一絃琴」だが、平安時代の貴族在原行平が須磨に流された際、自らの寂しさを慰めるために舟板と冠の緒で製作したという伝説からこの名前がついた。

須磨琴の起源は諸説あるが、それらが現在の須磨琴とどのように関係しているかを決定づける文献が発見されていないため、詳細は不明である。現在の須磨琴の歴史は江戸時代に覚峰が須磨琴を再興したことから始まる。当時須磨琴は精神修養の道具として愛用され、特に京摂(今の京都府や大阪府)で文人墨客の会合に須磨琴を演奏して興を添えることが流行した。また須磨琴の曲の歌詞には古典文学や催馬楽などを用いたものが多かったことから、神道の提唱や復古主義を唱える国学者や勤皇の志士の間でも須磨琴は受け入れられていった。その後幕末から明治にかけて、覚峰の孫弟子である真鍋豊平が全国各地を巡遊して須磨琴の普及活動を行った。しかし明治維新以降は復古思想の衰退や西洋音楽の輸入によって徐々に衰退していった。



Fig.1 須磨琴

戦後、高知県の秋沢久寿江が正曲一絃琴白鷺会を組織したことに呼応して、東京都の山城一水と松崎一水による一水会、京都府の平野美子と倉知素風による藻汐会が組織された。その中で 1955 年に秋沢、1957 年に山城、1961 年に平野と倉知が国の記録作成等の措置を講ずべき無形文化財の選択を受けた。

◎須磨琴保存会

1961年に須磨寺の境内で無形文化財保持者たちによる須磨琴の演奏会が開催され、その後須磨琴の祖である在原行平にゆかりがあり、覚峰が奉献した須磨琴を寺宝として所有する須磨寺で須磨琴を再興しては——という意見が出たことで、1965年

に小池美代子を筆頭として須磨寺を拠点に組織された団体である。現在は須磨寺管長が須磨琴保存会の会長を兼務し、須磨寺副住職と最高師範が副会長を務める。副住職は会長を補佐し、最高師範は他の師範とともに須磨琴の心を伝え、演奏技術を指導する。

須磨琴保存会の特色は、古い伝統のみを盲目的になぞるのではなく、音楽としての須磨琴の確立を目指していることだ。孤高の精神主義や時々の思想運動などと一体になり、時の流れ行くままに盛衰を繰り返してきた須磨琴の歴史を繰り返さないように楽器としての須磨琴の可能性を純粹に追求している。そのために須磨琴の音質の向上や低音琴の製作、他種の楽器との合奏など須磨琴の演奏の幅を広げるようになっていった。



Fig.2 演奏会に向けての練習風景